



特218  
486



始



持 21P

486



心の華叢書



世界の歴史に一大盤渦を生じ、萬丈の海濤を  
巻き起さしめし大戦のあとを歴覽するもの、誰  
か俯仰感慨の情に堪へざらむ。大洋の上にして  
雲と浪とに星と月とに幾十日を相對するもの、  
誰か懷を諷詠に寄するを思はざらむ。米山君は  
夙く米國に在りしより、經濟界の重鎮たる今日  
に至るまで、業務のかたはら常に吟藻を斷たず  
最近にことに、和歌の道に精進せらる。さきに

太平洋を航して歌日記八十七日を著し、今また米國を経て歐洲に遊び、歌集東又東の著あり。世界激戦の跡を訪ひ、去りて波瀾の重疊を望み感慨に蘊し諷詠に發したる百數十首、收めてこの一卷にあり。人世の眞の相を知れる作者の深き洞察の力より生まれたる巻中の幾首、就中、埃都麗泉宮シエーシブランの露臺にして、大きいくさ何處ゆ來しかはた往にしと歌へる、拿破里ナポレオンの灣頭に立ち

て、夢の島となやみの島と一ついろにと吟ぜるが如きにいたりては、想ふに永く世人の心胸に宿り、その琴線をうつものあらむ。

昭和五年二月

佐佐木 信綱

特218  
486

東  
ま  
た  
東

ま  
梅  
ま

太  
平  
洋

昭和四年五月十日横濱出帆の  
春洋丸に乗りて米國に向ふ

○ 船の名は春の洋うみてふさきはひに晴るる  
思ひす曇れる空も

○ 夢のみはそひ来てこよひ猶しおもふほだし絆  
たちきり船出せし身を

○ 甲板のおほひとり去られ五月さつき空いろ  
さ緑に晴れにたり今朝は

○ ともなへる吾兒わがこはいつしか人中おとなに大人び  
語る見つつわがをり

○  
たよりもちてかへるとするかこのいく日  
船につき來し鷗らみえず

○  
なみの面おもにうち消しいなむ昨夜よるべわが胸に  
浮べること二つ三つ

布哇にて  
浪しろき金剛石角ダイヤモンド・ヘッドあさ日さし常夏の國は  
かがよへるかも

米國の海軍根據地をのぞみて  
いづこかも風の聲して鷗な唳く真珠たまの灣うみは  
名のみめでたき



○ 檣ほしらに星かけ幾つあかつきを船はゆるぎて  
大うねりせり

○ 明日は陸くわときく夕空にあかねさす雲の  
入りまは港にかあらむ

桑港にて

○  
八たび我<sup>わが</sup>この港に出入<sup>でい</sup>りす金門の上に  
名もしるし得<sup>え</sup>で

○  
初夏の陽に岩群<sup>いわぐみ</sup>は浴<sup>ゆ</sup>してつとふ膺<sup>せう</sup>膺<sup>せう</sup>獸<sup>じゆ</sup>の  
毛なみかがよふ

○  
風薫<sup>かき</sup>る緑野<sup>ろくご</sup>の遠駒<sup>とんこ</sup>つらね打毬<sup>うちま</sup>の遊<sup>あそ</sup>すらし  
たて髪<sup>かみ</sup>をどる

此<sup>こ</sup>地<sup>ち</sup>にてうせつる友<sup>とも</sup>を忍<sup>しの</sup>びて  
いとせめて亡<sup>な</sup>きあととはむ骨埋<sup>ほねう</sup>むる地<sup>ち</sup>を  
えらばすと果<sup>は</sup>てにし我友<sup>わがとも</sup>

テキサスへの途上

○ 陸にしてまた白浪のうねりうねる大砂原  
に入る日出づる日

○ 汽車の動揺とみにはげしみ真夜中をくだ  
けし夢の飛ぶは何州ぞ

ダラスにて

国際ロータリー大会に出席して 二首  
今しここは早も真夏なり一萬の大衆つどふ  
もゆる思ひに

奉仕てふ心めでたき純絹ひたぎぬにそめたる國の  
四十餘よその旗

○  
みんなみのみどり野やがて白妙に綿しき  
満たむふくよかの町

セント・ルイスにて

荒川昌二君より新十郎大人の俄かに死去せられたり  
との電報をうけて驚愕哀惜極りなし 二首  
百日の後かへらむ我を待つといひし君は  
ゆきしか歸らぬ旅に

ミズリーのこの長橋をわたる人もまた  
かへりこむ君はかへらず

米國のここかしこ

○  
はてしなきこの大き國いづこにか低きは  
ありて水の流るる

○  
賑はしき都近からし花むしろきららかに  
敷ける墓地見ゆ

○  
よき習はしいまだ残れり旅の宿の卓に必  
古りし聖書あり

○  
黄金ふるあめりかの國の大男子旅人吾に  
錢をし乞ふも

○  
なるの如なるかみの如さわがしきちまた  
の空を高飛ぶ小鳩

○  
打たば響鳴りわたりなむ自由の鐘いたみ  
しあとはありもあらずも

○  
昔わがさすらへし宿さながらにまどしき  
若人今もありとな

○  
天に近み炎ともえて鐵くろがねを骨としたてる  
高き家やつづく

○  
故郷を思へば今宵この心ジャズの音色に  
合はすべしやは



ボストンのコンモン公園

遠つ祖羊放ちしコンモンは名にし負へれば  
人群れあそぶ

獨立戦争の初めワシントンが其下に立ちて號令せし  
てふケンブリッッジの楡樹今は枯れて切去られたり

指揮刀の光とどめていしぶみはうせし楡<sup>エルク</sup>  
の樹のあとに伏す

ロングフェローの舊宅を訪ふワシントンの昔  
住みつるところなり 二首

建國の武將すみしとふここにして鬼神<sup>おにがみ</sup>も  
泣く詩歌<sup>うた</sup>は生れけむ

心かたちうるはしかりし君にして玉振る  
聲の詩歌は生れけむ

○  
メイフラワーの錨おろすとさまよひし浦  
邊のどかに快艇ゆきかふ

ブリマックス岩に堅固なる圍なれり

あだ浪をさくとにし有らし國の基とうご  
かぬ巖いはほいやかたくせり

ロンケフェエローの詩に名高き清教徒の勇將マイルス  
スタンザツシが住みし丘の上に聳ゆる碑をながめて  
諸刃の劍ひつさげ立てるつはものも語り  
えぬ戀の憂うれへありしとふ

ロンケアイランドのモントリークに暑さを避く

よこたはり布晒らす如なす長島の島のはた  
ての風の涼しも

シヤトールカ湖畔のウエルチ博士の家にとどまりて  
しろがねの湖<sup>うみ</sup>べに住みて心すめる人の家  
に浴びまらうどのさち

○

こころせで夜頃すごしつ亞米利加の空にも  
月はすみけるものを

折にふれて

○  
過ぎし日の痛手つつみてゆく道の清水が  
もとに心はいこふ

○  
胸の奥よきにあしきに秘むる事の人には  
あらむまことの人に

○  
忘れはててあるべかりけれ人知れずわが  
せしことのまことしあらば

○  
もの言はずわが胸ぬちのかよひもて笑み  
つつあらば嬉しかるべき

○  
ねらひすまし弓につがへる矢おもてに風  
ささやけばためらふ吾か

○  
競ひ行く夢と實際まじごとの人の世は一尋いざなのほど  
夢の勝つべき

大西洋

七月十日巨船マセスタック號にて紐育を出立つ  
ニューヨーク不夜の都のかたはしの今宵  
浮ぶかこの大船は

自由の女像も眼下にあり

浮城の高くしあればかしこきや橄欖の冠  
見おろす今は

○  
都なすこれの浮城來しあとの浪にし残す  
ひろきちまたを

船中にて小説ソーレルス・サンをよみて

父と子のものがたりよみて泣く涙この涙  
はもますらをの領

英國に在りて

○

ウエストミンスターをまづまなかひに高く  
低くひろがる都風のよろしも

○

なやみます君が窓べにさもらふかバツキ  
ンガムの宮に照る月

○  
絳緘のよそひ凛々しく御門守る衛士が眉  
ねのすすしくもあるか

○  
ためらひ立つ石の面おもてにきざみたる大さ  
この名ようれしきこの國

○  
血のあとの倫敦塔のしのび草ふみてを立  
ちぬ橋開く間を

○  
馬を繋ぐ人すくなきも心とまる旗亭イシヤの門  
邊にいこひなむらび



ケンブリッヅ大學にて  
蔦かづら夏の色こくよそほへり古き學舎  
の窓あざやかに

パークストロインに隣接せるシャンド翁を訪ひて  
明治維新そがままに偲び八十年ちまり堆うづたかく  
つめる書ぬちに老翁は

サレ一の閑地に故渡邊専次郎君の遺族を  
おとなひて

美はしき水みちたたへたらちねは吾わ見こと  
よもぎが島づくりせり

## 佛蘭西にて

那翁の記念エトアールの凱旋門は先の歐洲大戰  
に失せつる勇士招魂のところとなれり

凱旋をただにたたへしは昔にて香華新た  
なりここに幾夏

○  
流行きそふ街のあゆみに喪の衣をかづく  
女のさはなりこの國

○  
大きいくさ千萬の若木枯らしめて老樹の  
大臣猶まつりごつ

瑞 西

ゼネバ湖畔の由緒など探りて  
ゼネバの湖めぐらひつつむ書のあと思想  
をたたふその下つ瀬に

ルーサーンにて詠める 二首  
晴れのぼる雲ゆ落ちくる山一つまた落ち  
きたる山の上に山

ルーサーンの湖行く船は山の上の館やかたさな  
がら漕ぎ出でしかも

ヨソフラウに登る 二首

嶺たかみ夏を冬なる山風は吹雪まじへて  
人に迫りく

永遠とこしへの氷の岩根雪の山とくる代あらず  
神のひめわざ

奥都維納

シエーレンブラン  
麗泉宮の榮光の露臺に立ち世界戦争につきて  
思ふこと久し 六首

大きいくさ何處ゆ來しかはた往にしぬし  
なき苑に玉撒く清水

汗の香にみる人皆のふみて行くふりし  
帝が薔薇の木の床

部屋ぬちの錦のよそひみみづから繡ひま  
しつとふ皇后の御手に

常盤木は外に色こく夏の陽のさし入る  
かたに御座あせたり

うるはしき壁畫にそへる寢臺あり果敢  
なき夢のこもれるか今も

後宮の井のもとにより玉盃に水掬ひけむ  
麗人いづら

那翁一時此宮に在りまうけし王子をここに  
失ひたりといふ

一夜にはならずとふ都かり寝せし英雄の  
夢よたのしかりきや

中央歐羅巴の途上

○  
北のかたアルプスはなれ國土のたひらか  
なるを人ら戦ひし

○  
歲月はよき晝にかへつダニユーブの河原  
ゆたかに牛むれ遊ぶ

○  
羊のむれ犬に追はせて家路さす安きは賤  
が伏屋にありけり

戦後の生活難に身投などするもの多しといふに  
渦まけるいくさのあとのよすがなみ水泡みづなわ  
と消えしかずしれぬ靈

洪牙利の都ブタペスト



此國の新らしく布ける政治のことなど思ひて  
道皆はあつまりむかふ丘の上の宮居の  
窓はとざしてありけり

昔ここの皇女マーガレット國のため身を捧げて  
神助を祈りしてふ跡にて

御堂ふりてすたれしかげに猶ひそむ女神  
の聲をさくか斯の民

新興國の都プラーグにて

この都は高き塔の數多きに有名なり

あららぎは古きいろを天にとどめつつ  
地みなものの新らしき國

○

言舉にせはしきこの國人に問はばや  
いづこボヘミヤぶりと

獨  
逸

伯林 四首

リンデンの並木の大路今もなほ臺高殿  
カイゼルの名を

つはものは數かぎられしこの國の街行く  
人のそろへる足なみ

今もなほ大<sup>たかひ</sup>き戦<sup>たたかひ</sup>忘れじと畫に映すかも其  
いくさ繪を

天つ船を今し降<sup>おろ</sup>來て裳裾輕うカフエーに  
いそぐこの少女ら

ホツダム離宮を訪ひて 二首  
風車音さやぎしも今は昔莫愁宮はあとも  
静けく

君いまさずこの廣庭君をしも覆ふべき  
木蔭猶しげかるを

倫敦を後に

○ やすかれと吾兒をとどめて人皆のわれを  
はげますに嬉しみ立つも

○ 旅なかば萬里の海をひとりかへるわれと  
残せる汝がむねは一つ

○ ややくに都はみえず朝の陽をとどめて  
遠に水晶宮のたつ

○ 牧草のみどりの浪の中わけて磯の香匂ふ  
ドーバーの驛に

馬  
耳  
塞

九月十七日ここより香取丸に乗り歸朝の途に  
上らんとて 二首

旅心おちゐなごみぬここにして天青く日  
の白き海べに

この港日の旗の船われを待てりこよひ  
望の夜月もさやけし

拿 破 里

○  
丘の上の古城につづく船ふねけぶり港の町の  
色はおぼろに

近き島は監獄のあるところ離れてモンテ・カイロー  
の島を望む

夢の島となやみの島と一ついろに畫がき  
染めたり紺青の海は

ポンペイを訪ふ

廢墟を詠める 十一首

地の底ゆほり出でしとふ門ゆ我きさはし  
ふみてミステリーの町に

アバンドンダシザ噴井は枯れて石はやけて見  
る人皆は渴き行くなり



たてぬきの大路小路をゆき行けば墓場に  
かよふ道もつづけり

酒も血も飲みほしてける死の街まちに裁判さばりの  
庭にわのありし石ずゑ

歡樂に人と獸けものを撃たせつる血の塚かみのあと  
草も生ひなく

きざはしの上にして忍ぶ花なせる装ひの  
色を天にどよむ聲を

大理石の水噴ける庭は壁の畫につながる  
ながめあかざりしかも

富めるものは寶とり出づる暇なく奴隸は  
苦をしのがると死にき

顔掩へる男稚兒いだける女皿の上にもら  
れたる麵麩くりやべの葱

世の終り二度な來そベスピヤス山祇の怒  
猶やまずあれど

○  
これぞこのテンプルのあとの石疊たたみて  
秘めしまことありきや

其夜亡兒と語ると夢みて

つねの如笑みつつありきボンベイを見し  
夜の夢に汝がかよひ來て

地中海

○ シシリーの島に帯なす白き町きれまを  
しるす古りしかけ橋

○ 賜はらば我いなむべしクリートの寂寞の  
島のかげを船行く

○ 紺青の海の匠は波がしら千々の尖りを  
纈纈に締む

○ 橋は月をかくすとかこちつつ船を東を指  
すにうれしも

埃及カイローを訪ふ

○ 麗人の血汐はかれて幾千年大きなナイルの  
とはに流るる

○ 乳と蜜を流すとふ流彼の岸に太陽の神は  
立ちて見ますかもよそに

英國駐屯軍が脅威なすさまをみて  
王宮に火砲<sup>ほづ</sup>むきてあれど面かくし女<sup>をんな</sup>らは  
行くかかはりもなう

○  
まなかひにピラミド一つやがて二つ駱駝  
の背<sup>せな</sup>に夏の眞日照る

○  
アブラハムの足あといづらさまよひし  
その砂原を月に車す

○  
水をへだて遠<sup>とち</sup>にありとふモーゼの井われ  
渴きつつゆきがてなくに

紅海

○ 暗礁くらいの上の燈臺守が手を振るにこたへ  
ざらめや燈臺守に

○ 沙漠の砂を飛蝗ひしをもて來く炎風ほのほかせ今日の船の  
上の長き日おもふ

アラビヤ海

船長よりモンスーンの謂れなどききて 二首  
ヒマラヤの大山祇も眞夏日は渴きて水を  
呼ぶとしいふなる

山祇の命令のまにま信風は洋倒まにささ  
ぐと化する



コロンボに上陸す

カンデー行 四首

月さゆるカンデーの路三十里椰子の木か  
げは白雪敷けり

あけがたを菩提樹しげる池のめぐり佛心  
いだきうたふか鳥は

聖<sup>き</sup>き蹟<sup>あき</sup>荒れて幾代ぞあはれにもみにくき  
堂を色どる散華

枝ゆ根の生ひて榕樹のひろごれるかげに  
午睡の久しこの國

ベンガルよりスマトラ海

○ 熱帯の海のあかつき明星は波にひたすか  
焦げしひとみを

○ ものかげかすかにも幾日みぬ船の衝き  
あたらんず城なせる島

○ 船は身をかはしてせばき島の間を出で  
はなるれば心はた豊に

○ たひらなる海のおもとみにさわだたせ  
しろがねの箭を夕立は射る

○  
稻妻の西に東にひらめけど海峡を廣み  
見えず山影

○  
三日の月天つ少女が玉手より海に落と  
せる黄金おとこねの櫛

新嘉坡

○  
洪水の荒れあとなして島いくつ木立おも  
げにうなだれ浮くか

○  
大船は島のひま／＼縫ひ行くも向ひたつ  
岸の椰子の葉を糸に

○  
獅子が嶋名は昔にて物音のけたたましき  
は車走るなり

英國の海軍根據地なのぞみて  
水にそひて一すぢの道さへざれりこの島  
ぬちの禁斷の場

○  
夜明くれば鳥むらなきて春せはし鸚鵡が  
つくる鶯の聲

○  
あかつきの暫しの冷<sup>ひえ</sup>を冬と知り虫の音を  
秋と知るとふ人ら

○  
相呼ばば答へむ鳥は赤道の炎のもとに  
ひかひてありけり

## ジャホール王國

英國の支配の下に其計らひのまゝに任せ従へる  
さまを見て

いかめしく愛らしきかも王が國くに守る  
すべも罪なかりけり

王のローマンスを

戀せよと外國の女追ひ來しを猶し同胞の  
血汐はも奇に

○  
木かげに入る淺き水の上流れこしは小舟  
にあらでむくつけき鰐

護謨園を行きて 二首  
千年の森開くと斧の光して山彦はつたふ  
國々の言葉

繁りつづく護謨の木肌の瘡新たにしたた  
る露は涙ならなく

支那海に入る



○  
みんなみゆ北の果さす大き虹下行く海の  
名は異なれり

○  
カムランの灣に一夜をわれは假らずあた  
もたぬ船は故郷ふるさとを前に

香港にて

○  
駒すてて花めづる思ひ乗りて來しわが大  
船をましたに今宵

○  
長かりし船幸おもふみんなみの屋氣樓  
なす島にし宿る

○  
ともし火の杭うちこみて向つ海九龍の  
街はうかびかがよふ

イースタン・シー

○ ひんがしの海の上の關と浪荒らしとがめ  
あらじなわがこの船は

○ 船すててこの島つづき大股に歩み行かむ  
かもやまと國民

○ 海の面を暗く明るく船よりも疾き雲脚は  
月のせ走る

○ 奇術家のわが船長はたくみにも小島あま  
たをならべ見せたり

○ 大船は空ゆ電信に暴風知るいとほし遠の  
漁り小舟

上海にて

○  
黄にそめる色もなつかし吾妹子と亡<sup>なきこ</sup>兒の  
かげをうつしつる水

○  
立ち寄らむ浦の柳の色あらた渭城の宿の  
雨ならなくに

○  
汐<sup>きり</sup>待の船はみなとに待ちかねて月の光に  
流れ出でしかも

○  
ここにして港の空のおもひ出の今宵さび  
しう月鯨けそめし

日の本に

○

舳さきに散るしぶきに映はえて五色いろの光まば  
ゆきその日の本に

濟州島 二首

やまと高麗空へだつれど海の底にかたく  
つなげるここの島かも

よする浪よせてはかへす過ぎしこと消し  
てはしるす島の絶壁

○

壹岐對馬みまくほりして船脚の遅かれと  
ねがふ今宵の海路

玄 海

○ 船はめぐり筑紫の海の外面より天拜山の見ゆるかしこさ

○ 博多の崎松のみどりを門にして九つの州つらなるらしも

○ 天ほがら浪高しもよ大きいくさ海のいさをの碑の嶋

○ 筑紫のや神つくらしし六連嶋おのづからなる城なせりけり



關門海峡

○ 舳先高う門司と赤間をたちきりて分けて  
のせゆくも吾が大船は

○ 大船はふむ足もともいかつげに往來ゆききの  
小舟の罵り行くごとし

○  
日は岡のかつて酒くみし高どのの障子照  
らすに過ぎしこと思ふ

○  
彼方はたわが船みるか詣で人数もよま  
る濱のみやしる

瀬戸の内海

○  
夜にあれば瀬戸の島々みれどわかず黒き  
は空に雲の飛ぶなり

○  
漁り舟網に鱗うろこの光して大船の前をせはし  
げに曳く

○  
島々にかがやきそめしともし火を帆かけ  
をりくさへぎり行くも

○  
今宵しも月出づる遅し船旅の果の一夜を  
寝ねで待てとか

○ 吾が命愛惜<sup>を</sup>み眺めつ瀬戸の海來島めぐる  
船の上に月を

○ 嶋の上の月のひかりは海のおもを船にと  
わたす白銀の橋

○ 島々はややかに遠ざかり海はややかに廣ごり  
行きぬ月はた高く

我が香取丸の神戸に著きたるは  
九月二十三日の拂曉なり

### 神戸の港に入る

○  
銅鑼の音に夢やぶるれば船はもよ友の  
かこみの中にありはや

○  
船守りて四十夜あまりを見えがくれそひ  
來し月もわかるべきかな

何をしもわれは見えてこし見て出でつる  
若葉の庭に秋のいろこき

うすあかり馴れし歩みを書の窓に入れば  
なつかし菊のかたりも

昭和五年三月二十日印刷  
昭和五年三月二十五日發行

(非賣品)

著者

東京市赤坂區青山町六丁目百十六番地  
米山梅

吉

發行所

東京市本郷區西片町十番地  
竹柏

會

印刷者

東京市京橋區銀座西七丁目五番地  
小林國

泰

印刷所

東京市京橋區銀座西七丁目五番地  
東京國文

社

終

